

タイ王国チュラロンコン大学と応用化学専攻の交流



海外交流

櫻井英博*

Relationship between Chulalongkorn University, Thailand,
and Department of Applied Chemistry, Osaka

Key Words : Chulalongkorn University, Joint Symposium,
Invitation Program, Student Exchange

はじめに

工学研究科応用化学専攻を中心とした化学系の国際大学院プログラム「Chemical Science Course (CSC)」が2015年度よりスタートした。これまで留学生の獲得は各教員の個人的なリクルート活動でも十分であったが、今後はより組織的な活動が求められる。またダブルディグリープログラムなど、大学間の連携が強く求められている案件も多くなってきたことから、中長期的な波及効果を意識し、JSTのさくらサイエンスプラン (SSP) を利用したアジアの若手教員の招聘プログラムを実施している。短期招聘プログラムの多くは物見遊山的になることが多く、学生を招聘対象とした場合、本人たちが「ただで日本を旅行できた」程度の満足感で終わってしまうことが多い。本人の就学機会へのモチベーションを上げる可能性はあったとしても、なかなかその後の波及効果が期待できない。一方、アジア各国は研究教育の強化のために、欧米諸国で学位を取得した意欲的な若手の教員採用を進めている。彼らの多くは研究意欲を維持しつつも、インフラを含めた研究環境に苦勞をしており、海外との共同研究を強く求めている。また同時に、学生が海外留学する際の良き相談窓口ともなっている。彼らは自らが学んできた欧米諸国にその相手先を求めるケースがほとんどであるが、地理的な制約などから必ずしもパートナ

ーとして適切ではない場合も多い。このような欧米諸国で学んできた優秀な若手研究者に対し、大阪大学の研究教育環境を紹介し、また共同研究相手を見つけてもらい、さらには最終的には、「日本最良」になってもらうことが我々のプログラムの目的である。すなわち、より地理的に近い大阪大学で研究パートナーが見つければ、学生の相互交流も容易になり、さらに学生の留学先として大阪大学を勧めやすくなるため、その教員が第一線で活躍している限り、中長期的な波及効果が期待できる。実際、SSPが始まって以来、その関係者（参加者の学生など）が毎年CSCを受験しており、中長期のみならず短期的にもすでに効果が確認されている。

このような若手教員をターゲットとした交流の一環として、アジア諸国全般を広く対象としているSSPとは別に、特定の大学に対してさらに教員間の交流・理解を深め、恒常的な学生交換や、将来的なジョイント（あるいはダブル）ディグリープログラムへむけた取り組みを始めることとし、その第一弾として、タイのチュラロンコン大学へ訪問し、ジョイントシンポジウムを開催した。その詳細について報告する。

チュラロンコン大学との関係

チュラロンコン大学はタイ屈指の総合大学であり、化学教室 (Department of Chemistry, Faculty of Science) の歴史も100年を超え、名実ともにタイのトップ校としてタイの科学技術を支えている。現在のThe Petroleum and Petrochemical Collegeの学部長であるSuwabun Chirachanchai博士は、当専攻出身であり(1995年博士修了)、これまでも個人的なつながりを利用して数多くの留学生、交換留学生を受け入れてきている。先述のSSPにおいても、3年連続で若手教員を化学教室から招聘してきた。



* Hidehiro SAKURAI

1965年12月生
東京大学大学院 理学系研究科 化学専攻 博士課程 (1994年)
現在、大阪大学大学院 工学研究科 応用化学専攻 物理有機化学領域 教授 博士(理学) 有機化学
TEL : 06-6879-4591
FAX : 06-6879-4593
E-mail : hsakurai@chem.eng.osaka-u.ac.jp

このように、特に高分子科学分野を中心にこれまでも多くの交流実績があるものの、相互認知度の観点からはやや分野に偏りがあり、より幅広いエリアでお互いのアクティビティーを認知し、学生交換を促進しようという話がまとまった。そこで今回は阪大の教員が訪泰し、one-day symposium を開催することとなった。

The 1st CU-OU Joint Symposium

日程は、タイ化学会主催の国際シンポジウム PACCON 2017 の開催日、2017年2月2-3日に合わせて、2月1日に、チュラロンコン大学化学教室で開催することに決定した。過去の SSP の参加者である、Pannee Leeladee, Wipark Anutrasakda, Junjuda Unruangsri の3氏が世話役となって準備を進めてくれた。大阪大学からは、先方の学術的関心度の高さと分野のバランスを考慮して、井上豪教授、宇山浩教授、生越専介教授、木田敏之教授、松崎典弥准教授、および小職の6名が訪泰し、PACCON 2017 と合わせて出席した。また空き時間を利用して、JSPS バンコクオフィスや大阪大学 ASEAN オフィス等の訪問も行った(詳細は略)。

シンポジウムは Vudhichai Parasuk 化学科長の開会宣言で始まり、双方の化学教室の紹介後、日本側6名、タイ側4名の研究紹介があった(写真1)。議論は白熱し、質疑応答が非常に活発に行われた(写真2)。シンポジウムの最後は、チュラロンコン大学からの SSP を含めたここ最近の阪大との交流実績の報告とこれからの期待についてのスピーチで締めくくられた(写真3)。引き続き場所を会議室に移し、国際交流担当を含めて、今後について深い議論が行われた。主たる内容は、1) 学部生の短期留学の定期的なプログラム開設について、2) 大学院



写真1. 1st CU-OU Joint Symposium の参加者

プログラム、特にジョイントディグリープログラムの可能性について、であり、face-to-face で議論することで、かなり踏み込んだ内容まで問題点を共有することができた。今回では各案件に関して結論を出すには至らなかったが、引き続き議論を進めること、現在進行中の SSP や学生間交流をさらに活発に行うこと、さらに第2回のシンポジウムを阪大で開催すること、などを決定した。



写真2. 1st 白熱した議論の様子



写真3. シンポジウムの最後に記念品の贈呈

夕方4時からは、場所をさらに The Petroleum and Petrochemical College (PPC) に移し、同窓生である Suwabun 学部長を交えて、ここでも特に高分子科学分野の今後の具体的な連携について深い議論が進められた(写真4)。実際に Suwabun 研では多くの学生を阪大に派遣しており、また阪大からも今回の参加者の一人である松崎准教授がかつて Suwabun 研に留学した経験があるなど、すでに活発な相互交流が行われているため、あとは組織としての関係の深化について議論が進められた。最後は、現在 Suwabun 研で博士研究員として在籍している

松本匡広博士（本学卒）なども交えて、食事をしながらのフリートークとなった（写真5）。



写真4. Petroleum and Petrochemical College での議論の様子



写真5. Suwabun 教授らを囲んで

おわりに

以上のように、チュラロンコン大学（Chemistry and PPC）と本学応用化学専攻とは、組織間連携へ向けて大きな一歩を踏み出した。国際交流に関する予算は非常に限られており、特に今回のように6名もの教員が訪問する大規模な交流については、各人の個人研究費で負担しなければいけないのが現状である。にもかかわらず快く協力していただいた先生方に深く感謝いたします。今年度のSSPへもチュラロンコン大学からの若手教員の招聘が決まっており、またCSCの2017年10月入学生にチュラロンコン大学出身の学生の入学が決まっており、確実に交流実績が積み重なってきている。両者の関係はすでに約30年の歴史があるが、今後の30年へ向けてさらに組織間の連携を強化していきたい。

